

奈良・来迎寺の善導大師坐像の造立背景

——結縁交名を手がかりとして——

小野 佳代

はじめに

奈良県旧都祁村の来迎寺には、鎌倉時代に制作された木造等身の善導大師坐像（図1）が伝来している。善導（六一三―六八二）は中国浄土教を大成した唐代の僧侶で、称名念仏三昧を唱導したことで名高い。日本で浄土宗を開いた法然上人は自らの著『選択本願念仏集』の中で「偏依善導一師」と述べており、法然自身が善導の教えに傾倒し、また善導を崇敬していたことから、浄土宗の寺院では開祖の法然とともに、善導の肖像を祀る寺院が少なくない。来迎寺の善導大師坐像は、他の寺院に伝わる善導像とは異なり、右膝を曲げて左膝を立てた珍しい肖像彫刻で、その胎内には、造像に際して法縁

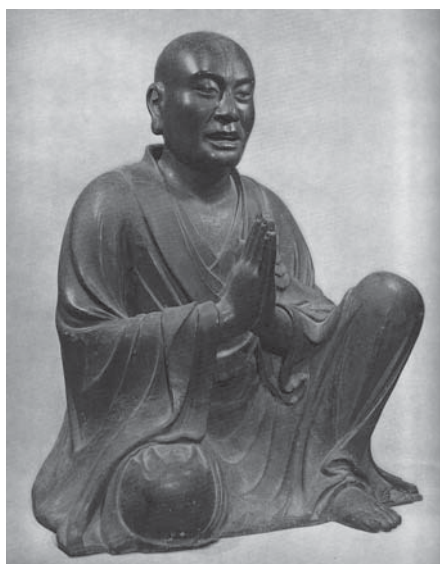


図1 奈良・来迎寺 善導大師坐像
（鎌倉時代）

を結んだ人達の名前、すなわち結縁交名が書かれている。しかしながら、交名中の誰に注目するかは、美術史と仏教史の研究者間で異なっており、それゆえ善導大師坐像の造立背景や意味づけも一致していない。そこで

本稿では、改めて来迎寺の善導大師坐像の結縁交名を取り上げ、人々の交流に着目することによって、来迎寺の善導大師坐像が造立されるに至った背景の一端を明らかにしてみたい。

一、来迎寺の歴史

来迎寺の善導大師坐像（以下、来迎寺像と称す）はその作風から鎌倉時代の作と考えられているが、具体的にいつ制作された肖像なのであろうか。まず来迎寺に伝わる古文書を通して、来迎寺の歴史を簡単に振り返ってみよう。

来迎寺には『涅槃山多田来迎寺記録』（以下『来迎寺記録』）と呼ばれる四〇丁余りの和綴じの古文書が伝来している。^①この文書は安政元年（一八五四）の写本であるが、代々の寺僧による書き継ぎの形をとるもので、内容は鎌倉期から江戸末期までを含む史料である。これによると、来迎寺は天徳二年（九五八）の春、淳粋阿闍梨が、その昔行基が涅槃山と名づけた墓所に庵室を結んだことに始まるという。その後永久二年（一一一四）に相川城主であった安部九郎則宗が発心入道し、蓮阿（蓮阿弥陀仏）と号して涅槃山に仏堂を建立し、吐山より阿弥陀如来像を奉遷して涅槃山蓮城院来迎寺と号したという。保元二年（一一五七）には第二世顕鏡阿闍梨が住職となった。この時期、この地を墓所とする庄郷も広がり、近隣の寺侍達が帰依して旦那となり、さらに大和多田氏の祖である多田経実も来迎寺に帰依した。経実の次男は出家して来迎寺に入り、了日と号して第二世顕鏡の弟子となった。承久三年（一

二二二)、顕鏡遷化の後、了日が第三世住職となり、この頃より涅槃山多田来迎寺と号すようになったという。また、この付近は平安時代末期には使者葬送の墓地と定められた場所だったようである。

さて、問題となるのは『来迎寺記録』の善導大師像に関するつぎの記述である。

昔天平七年来朝大唐善導大師御自作肖像 筑紫羽方着舟 明天平宝字八年依靈夢 当国藤(藤井) 三光寺江移 歳久安置 建暦元年 其辺乱ニ依 当寺ニ陰ス 其後迎トモ帰リ玉ズ 大師靈驗委縁起有略ス 文暦元年 法然上人弟子勢観房源智上人 大師安置ノ由聞 当寺来 大師ヲ拝 希代之尊像ト恐入玉フ也

これによると、まず善導大師像は大師自らが作った肖像で、天平七年(七三五)に大唐から筑紫の博多に船で到着し、天平宝字八年(七六四)に靈夢によって大師像を藤井の三光寺へ移し、歳久しくここに安置したという。ところが建暦元年(一二一一)、その辺りに乱が起こったため、来迎寺に隠すことになった。その後、三光寺から迎えがあるも、大師像を運び出せなかった。文暦元年(一二三四)、法然上人の弟子の勢観房源智上人は大師像が安置されていることを知り、来迎寺を訪れて大師像を拝したという。

右の記述は縁起的な内容を多分に含んではいるが、善導大師像が本来、来迎寺のために作られた像ではなく、建暦元年(一二一一)に戦乱を避けて天理市藤井の三光寺から移されてきたものと伝承されてきたことは興味深い。もし、最初から来迎寺のために造立された大師像であつたならば、このような伝承がわざわざ創作される必要もなからう。そうしてみると、来迎寺像が他寺から移ってきたというのは真実に近い可能性も考えられる。

二、来迎寺像の胎内銘

つぎに、来迎寺像に関するより確実な史料である胎内銘をみていきたい。胎内銘は、像内の内刻面に黒漆を塗った、その上から白色顔料を用いて書か

れている。

そうけん如

心阿弥陀仏 藤原貞近 にん阿弥陀

金阿弥陀仏 清原氏同清

ほうかいす志やのふん一 田口氏

南无阿弥陀仏 願アミタ仏

藤原真正 理工□春

(尊像子) 南阿弥陀仏 春阿弥陀仏

(梵字) 上アミタ

(梵字光明真言等)

まず冒頭の「そうけん」は造頭⁽²⁾の意で、四行目の「ほうかいす志やのふん」は法界衆生の分と解する説が提示されているが、そのほかは、来迎寺像の造立に関わった結縁者たちの名前である。ここで注目されるのは、結縁者のうち心阿弥陀仏、藤原貞近、金阿弥陀仏、藤原真正、清原氏、田口氏の六人が建仁三年(一二〇三)に仏師快慶によって制作された醍醐寺三宝院の不動明王坐像(以下、醍醐寺像)にも同様に結縁していることである。来迎寺に調査が入った一九五二年以後、来迎寺像の結縁者の名が醍醐寺像の銘にも見出せる事実は、広く研究者の知るところとなった⁽³⁾。

醍醐寺像の胎内銘文の該当箇所はつぎの通りである⁽⁴⁾。

(胸部)

大江信良 同宗信 □アミタ仏

沙弥円仏 僧信覚

建仁三年^五三^三明^之

巧匠アン(梵字) 弥陀仏 僧

僧澄玄 僧智嚴

(背部)

覚如房 田口氏

戒忍房清原氏 童卜、

清原氏 西アミタ仏

藤原貞近

信覚 重長

充円

金阿弥陀仏 重近

心アミタ仏 藤原真正 寂忍

有道行平

まず胸部の銘文をみると、中ほどに建仁三年（一二〇三）という紀年があり、その後に巧匠アン（梵字）弥陀仏と記されている。すなわち、醍醐寺像は建仁三年に仏師快慶によって造立されたという。さらに背部の銘文には、来迎寺像に結縁した心アミタ仏、藤原貞近、金阿弥陀仏、藤原真正、清原氏、田口氏の六人の名を見出すことができる。このように来迎寺像の結縁者と醍醐寺像のそれらが共通するということは、松島健氏の指摘もあるように、この両像の造立時期が近かったことを物語っており、つまり来迎寺像の造立年代が建仁三年と隔たらない頃であったと推測されるのである。とすれば、来迎寺像は十三世紀初頭の善導大師像ということになり、現存する善導大師像の中では最古の像として位置づけられるのである。先の『来迎寺記録』では、善導大師像が天理市藤井の三光寺から来迎寺に移された年を、建暦元年（一二一一）としていたが、建暦元年は建仁三年のわずか八年後である。造立の数年後に、事情あつて大師像を来迎寺に移したというのはありえない話ではない。事実に近い内容を伝えている可能性もあろう。

三、結縁交名にみえる金阿弥陀仏と春阿弥陀仏

来迎寺像の結縁者の中には、醍醐寺像のほかにも他寺の仏像の結縁交名

や、古文書類に同様の名が見出せる人物も存在する。こうした他の記録に登場する人物に注目し、彼等が活躍した地域や、彼等の信仰上のつながり、つまり結縁ネットワークを探ることによって、来迎寺像の制作背景を検討してみたい。

そこで注目したいのが、来迎寺像の結縁者のうち「金阿弥陀仏」と「春阿弥陀仏」の二人である。後者は最後の一字がはつきりしないが、「仏」と読むほかあるまい。したがって、この二人はともに阿弥陀仏号を名乗っていることになるが、これは寿永二年（一一八三）頃から俊乗房重源が自らを「南無阿弥陀仏」と名乗り、弟子や帰依者にも阿弥陀仏号を勧めたことによる⁶。仏師快慶が自らの作品に「巧匠安阿弥陀仏」と署名しているのも、まさに重源の影響によるものである。鎌倉時代の多くの結縁交名から阿弥陀仏号が見つかっていることから、当時いかに阿弥陀仏号を名乗ることが広まっていたか、またいかに重源の影響が大きかったかが窺える。こうした阿弥陀仏号が流布する中で、慈円が『愚管抄』第六に記した「大方東大寺ノ俊乗房ハ。阿弥陀ノ化身ト云コト出キテ。ワガ身ノ名ヲバ南無阿弥陀仏ト名ノリテ。万人ニ上ニ一字ヲキテ。空アミダ仏。法アミダ仏ナド云名ヲ付ケルヲ。誠ニヤガテ我名ニシタル尼法師ヲ、カリ。ハテニ法然ガ弟子トテカ、ル事ドモシ出タル。誠ニモ仏法ノ滅相ウタガイナシ。」という非難が出てくるのである⁷。

まず、来迎寺像に結縁した「金阿弥陀仏」からみていきたい。金阿弥陀仏は、先にあげた醍醐寺三宝院の不動明王坐像のほかにも、京都・遣迎院阿弥陀如来立像や、奈良・安倍文殊院騎獅文殊菩薩坐像、奈良・興善寺阿弥陀如来立像、三重・新大仏寺阿弥陀如来坐像にも結縁していることで知られている。金阿弥陀仏が結縁したこれらの仏像は、来迎寺像以外すべてが快慶の作品であることは注目される⁸。快慶といえば、重源の作善による仏像の多くを手がけた慶派仏師であつた。右に挙げた快慶作の不動明王坐像を祀る醍醐寺は、重源が十三歳から六十一歳までの長きにわたり所属していた寺であり、また、三重・新大仏寺もまさに重源が建てた伊賀別所に他ならない。以上を踏まえれば、来迎寺像に結縁した金阿弥陀仏とは、重源のもとに集まった念

仏衆のうちの一人であったと解せられる。

つぎに、「春阿弥陀仏」をみよう。春阿弥陀仏は先の金阿弥陀仏とは異なり、結縁交名ではなく、むしろ古文書類にその名を見出すことのできる人物である。まず建久八年（一一九七）六月十五日に、重源が管理してきた東大寺の東南院領の莊園を後継者に譲り渡すことを記した「重源譲状」をみると、備前国長沼・神前両庄の預所職に、年来同行の得阿弥陀仏と春阿弥陀仏の兩人を補すことが記されている。⁹とくに重源が尽力を注いで経営してきた東南院領の譲状に登場する春阿弥陀仏は、石田尚豊氏が指摘するように、¹⁰重源の同行衆の中でも特に信任の厚い人物であったと推測される。

さらに、正治二年（一二〇〇）十一月の紀年をもつ、つぎの三つの文書もみておきたい。

- 一、「周防国在庁官置文」（『東大寺文書』¹¹）
- 二、「周防阿弥陀寺田畠坪付」（『周防阿弥陀寺文書』¹²）
- 三、「周防阿弥陀寺田畠坪付」（『周防上司家文書』¹³）

これら三つの文書のうち、一と二の文書には重源の署名と花押があり、さらに三つのすべての文書には、その末尾に「目代 春阿弥陀仏（花押）」という署名が記されている。以上から春阿弥陀仏と重源のごく近い関係が知られるとともに、春阿弥陀仏が目代という要職にあったこともわかる。

周防国といえば、東大寺造営料に指定された国で、東大寺の鎌倉復興の際、木材を東大寺に供給する重要な柚のあったところで、そこに重源は周防別所を建てたことはよく知られている。一所に留まることの難しい東大寺大勧進職の重源に代わって、周防における目代を任されたのが春阿弥陀仏だったのである。さらに、一の文書には、念仏衆として「金阿弥陀仏」の名も見出すことができる。この文書に登場する「金阿弥陀仏」も来迎寺像に結縁した金阿弥陀仏と同一人物と考えられている。¹⁴となれば、周防別所の念仏衆であった金阿弥陀仏と、目代の春阿弥陀仏の二人は、重源を介して周防別所で出会い、十三世紀初頭に南都の地において、善導大師像（来迎寺像）に結縁

したということになる。

伊東史郎氏は、金阿弥陀仏と春阿弥陀仏の二人までが重源関係の史料に顔を出す人物であつてみれば、重源と来迎寺像との間には深い繋がりを考えることができるとし、そのような眼で来迎寺の胎内銘文を再読すると、中央に記された「南無阿弥陀仏」は重源その人として理解されなければならないと述べている。来迎寺像の造立にあたり、重源やその周辺の人物が関わっていたことはほぼ間違いあるまい。

四、正行房の善導御堂と来迎寺像の造立

来迎寺像を重源との関わりから解釈する前章における見方とは別に、仏教史の方面から、法然と親交のあった「正行房」と関連づけて解釈する見方がある。この見方は、昭和三十七年四月に奈良・興善寺の来迎形三尺の本尊阿弥陀如来立像（図2）の胎内から、法然・証空・親蓮・欣西・円親らが「正行房」に宛てた消息や封書が発見された、いわゆる昭和の大発見の後に出てきた解釈である。発見された消息・封書の背紙には、正行房が両親の追善供養のために発願した阿弥陀如来像に結縁した千五百四十八人の交名が連記されていたが、その中に来迎寺像に結縁した願阿弥陀仏、金阿弥陀仏、上阿弥陀仏、清原氏、田口氏、藤原真正の六人の名が見出されたのである。このうち金阿弥陀仏、清原氏、田口氏、藤原真正は、先述の醍醐寺像にも結縁していることから推せば、来迎寺像、醍醐寺像、興善寺阿弥陀如来像の三像の間には共通する信仰ネットワークがあったことになる。



図2 奈良・興善寺 阿弥陀如来立像（鎌倉時代）

そこで堀池春峰氏は、来迎寺像と興善寺阿弥陀如来立像に結縁した「願阿弥陀仏」に着目する。同氏はこの人物を、建長四年（一二五二）五月十五日の「願阿弥陀仏灯油米寄進状」によって同年七月二日に没した比丘尼・願阿弥陀仏と解している。¹⁶この寄進状によると、彼女は「滅罪生善・往生淨刹」のために山辺郡鳥羽池内の田二段の所当米三升を大仏殿御灯料に寄進し、その該田を彼女の長女と思われる源姉子に譲与したという。同氏はこの「池内」を旧都祁村来迎寺の近在にある小字「池ノ内」とみなし、池内田を私有していた比丘尼・願阿弥陀仏とは来迎寺の近くに居住していた人物であり、来迎寺善導大師像造立にあたって、近在の人々とともにその造像に助縁したのではないかと推測している。

また堀池氏は、興善寺阿弥陀如来像の胎内文書の一通である二月 日付の「証空書状」にみえる「その善導、み、た、うはて候なは、とく／＼してのほらせ給ひ候へし」という記述にも着目している。この「証空書状」には、これとは別の箇所に、源空の高弟真観房（感西）の死去について往事を追想する文句があることから、真観房が没した正治二年（一二〇〇）からそう遠くない頃の情報と考えられている。¹⁷とすれば、正行房は正治二年頃、善導御堂の建立を進めていたことになる。善導御堂とは善導大師像あつての御堂であるから、当然のことながら正行房はその頃、善導大師像の造立も計画していたに違いないのである。堀池氏は、来迎寺善導大師像は元来当寺に安置する目的で造像されたものか、はたまた他寺より移納されたものか詳らかにし得ないとしながらも、後世の記録では来迎寺は源氏の分流多田氏の創建と伝え、源氏と深い関係にあつたことを暗示しているとし、先の願阿弥陀仏や源姉子もこの結縁関係者であつたことは興味深い史実であると述べ、正行房と願阿弥陀仏、善導大師像と善導御堂の間には何等かの関連性があつたことを示唆している。

ところで興善寺とは、奈良県十輪院に隣接する場所に建つ浄土宗の寺院で、その創建は天正十七年（一五八九）と伝えられる。本尊は先に述べた正行房発願の阿弥陀如来像（図2）であるが、その左足柄外側に後筆で、「奉寄進阿弥陀之」□東山内田原村□之聖念仏□□正十七年□四月

廿□日と四行にわたって寄進銘が記されている。堀池氏は、寄進銘の「□正十七年」を興善寺が創建された「天正十七年」と読み、まさに興善寺の創建時に、奈良市東方の東山田原村より念仏衆らによって寄進されたのが本像であつたと解している。東山田原村とは、来迎寺のある旧都祁村の北西に隣接する村である。つまりこの阿弥陀如来像は、興善寺創建以前は、旧都祁村の近隣の地で念仏衆によって守られてきた像であつたことになる。来迎寺像は『来迎寺記録』によると、建暦元年（一二一一）に天理市藤井の三光寺から移されてきたものであつた。天理市もまた旧都祁村のすぐ西側に接しており、来迎寺像が本来は来迎寺の西側近隣の寺で所蔵された像であつたと伝承されてきたのは誠に興味深い。

先述のように、来迎寺像は十三世紀初頭、建仁三年（一二〇三）頃の造像と推測されるが、この年代が正行房によって善導御堂の建立が進められていた正治二年（一二〇〇）頃からほど近いこと、また正行房発願の興善寺阿弥陀如来像がもと来迎寺近隣の田原村で念仏衆に守られていたこと、さらにこの興善寺阿弥陀如来像や来迎寺像に結縁した比丘尼・願阿弥陀仏が来迎寺の近くに居住していた人物と推測されることを総合して、堀池氏は、正行房は旧都祁村の来迎寺と深い関係にあつた僧であり、来迎寺自体、大和国の専修念仏教団の根拠地であつたのではないかと論ずる。

また伊藤唯真氏は、来迎寺の善導大師坐像を安置した影堂が、興善寺阿弥陀如来像胎内文書のうちの「証空書状」に出てくる善導御堂であつたかどうか、両者の完全な一致を主張するにはなお躊躇するものがあるとしながらも、来迎寺像と興善寺阿弥陀如来像の結縁者の共通性や、来迎寺善導堂の須弥壇も逸品であることなど幾つかの状況証拠から、正行房が造営した善導御堂とは、来迎寺の善導堂のことで、その本尊が今に伝わる善導像であつた可能性は極めて高いという。¹⁹そして正行房は法然やその入室の弟子たちとも親交があり、南都の専修念仏衆の中心人物であつたことは疑いないと述べる。

来迎寺像が本来は正行房造立の善導御堂に安置された善導像であつたとする伊藤氏の指摘は大変に示唆深いものがあり、その蓋然性は高いといえよう。しかしながら、正行房が造立した善導御堂が来迎寺の善導堂であつたと

みるのはどうであろうか。もし来迎寺像が最初から来迎寺の善導堂に安置するために造立された像であつたなら、なぜそうした伝承が残らずに近隣の他寺から移ってきたという由来をわざわざ伝承してきたのか疑問が生ずる。ともあれ、十三世紀初頭に、旧都祁村かその近隣の地で善導大師像が造立され、今日まで守られてきたことは疑いのないことといえよう。

五、来迎寺像の結縁者の人的ネットワーク

第三章において来迎寺像に結縁した金阿弥陀仏と春阿弥陀仏に着目したところ、来迎寺像は重源周辺で造立された像と考えられたが、その一方で、第四章において比丘尼・願阿弥陀仏に着目したところ、来迎寺像は法然と親交のあつた正行房周辺で造立された像であつた可能性が高まつた。果たして来迎寺像は重源周辺と正行房周辺のどちらで制作された像だつたのであろうか。それともその両者の間を行き来する鍵となる人物でも存在したのであろうか。

そこで注目したいのが金阿弥陀仏である。金阿弥陀仏は先述のように、重源が好んで起用した快慶の作品群に結縁している人物で、重源の周防別所や伊賀別所に出入りしたほか、重源が指揮をとつた東大寺南大門の金剛力士像の納入品にも名前が見えるなど、まさに重源周辺の念仏衆の一人であつた。金阿弥陀仏のように熱心な念仏衆であつたならば、大和国の専修念仏教団の根拠地と目される旧都祁村周辺の地へ興味が向かわなかつたはずはあるまい。現に金阿弥陀仏がその地の中心人物とされる正行房発願の興善寺阿弥陀如来像に結縁していることから推しても、金阿弥陀仏はその頃、正行房周辺にも出入りするようになっていたと思われる。

ところで興善寺阿弥陀如来像の結縁交名には、名前のすぐ後に唱えた念仏の回数が併記されている。念仏を「十返」唱えた者もあれば、「百返」「千返」の者もあり、さらに「万返」「二万返」「三万返」も唱えた者もある。中でも目を引くのは、結縁者千五百四十八人のうち「百万返」を唱えた者が三十三名みられることで、そのうち一人は「三百万返」も唱えている。この「百万返」「三百万返」を唱えた三十三名はことに熱心な念仏衆であつたといえよ

う。そこで、親蓮が正行房に宛てた「親蓮書状」の紙背に書かれた結縁交名をみてみると、その二十行目に「願阿弥陀仏百万返 金阿弥陀仏十万返」とあるのが目に止まる。この二人はどちらも来迎寺像に結縁した人物であるが、願阿弥陀仏は百万返も念仏を唱えており、十万返唱えた金阿弥陀仏を上回る熱心ぶりだつたようである。つまり、来迎寺の近隣に住していたとされる願阿弥陀仏は、正行房の周辺にあつてひとときわ熱心な念仏衆であつたといえる。それにも増して興味深いのは、千五百四十八人の結縁交名中、願阿弥陀仏と金阿弥陀仏の二人の名が連ねて書かれていることで、両者の近い関係が推測せよう。おそらく願阿弥陀仏と金阿弥陀仏は面識があり、信仰上の交流があつたのではなからうか。すなわち、重源周辺で活動していた金阿弥陀仏は、正行房によって興善寺阿弥陀如来像が発願された正治二年（一二〇〇）頃、すでに正行房周辺の念仏衆とも交流があり、なかでも熱心な比丘尼の願阿弥陀仏のことはよく知っていたと思われるのである。

そして建仁三年（一二〇三）頃、旧都祁村周辺の地で善導大師像（来迎寺像）は造立されることになる。この善導像が発願された時、願阿弥陀仏は堀池氏のいうように、近在の人々とともにその造像に助縁したのであろうし、金阿弥陀仏は周防別所で旧知の仲にあつた春阿弥陀仏らを誘つて結縁したものと推測される。来迎寺像のほか、醍醐寺像や興善寺阿弥陀如来像に結縁していた藤原真正、田口氏、清原氏らは、両者の信仰ネットワークで繋がる人物であつたと解釈することができよう。

おわりに

奈良・来迎寺の善導大師坐像の造立背景の一端を明らかにすべく、来迎寺像の胎内に書かれた結縁交名に着目し、結縁者たちの交流について検討してきた。結縁交名にみえる金阿弥陀仏は重源の近くにいた念仏衆の一人であり、また春阿弥陀仏は重源の周防別所の目代をつとめた人物であつた。つまり来迎寺像には重源の周辺にいた人物が結縁していたことになる。しかしその一方で、結縁交名にみえる願阿弥陀仏とは、法然と親交のあつた正行房が発願した興善寺阿弥陀如来像にも結縁している人物で、来迎寺近隣の地に住

していた比丘尼・願阿弥陀仏のことと考えられた。

つまり、来迎寺像の造像には重源と正行房、その両者の周辺にいた念仏衆らが関わっていたことになり、中でもその両者の間を行き来していた金阿弥陀仏が、両者の信仰ネットワークをつなぐ重要な役割を果たしていたと考えられた。正行房は南都の専修念仏衆の中心人物と目される僧侶で、彼が正治二年（一二〇〇）頃に建立をすすめていた「善導御堂」の中に安置するために造立されたのが、まさに来迎寺像だったのではなからうか。すなわち、来迎寺像は建仁三年（一二〇三）頃、旧都祁村周辺の地において、重源周辺の念仏衆と正行房周辺の念仏衆とが信仰上の交流をもつ中で造立された記念すべき像であったと解釈でき、そうした像なればこそ、重源自身が積極的に来迎寺像の造立に関わっていた可能性も見えてくることになる。

註

- (1) 『都祁村史』（都祁村史刊行会、一九八五年）、『改訂 都祁村史』上巻（歴史編）（都祁村史編纂委員会、二〇〇五年）。
- (2) 倉田文作「奈良来迎寺の善導大師像」（『ミュージアム』一一八、一九六一年）。
- (3) 『奈良県総合文化調査報告書 都介野地区』（奈良教育委員会、一九五二年）。
- (4) 水野敬三郎ほか編『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代造像銘記篇』第二巻（中央公論美術出版、二〇〇四年）を参照した。
- (5) 松島 健「善導大師像 来迎寺」（『國華』一〇〇一、一九七七年）。
- (6) 『南無阿弥陀仏作善集』「阿弥陀仏名付日本国貴賤上下事、建仁二年始之成廿年」（小林剛編『俊乘房重源史料集成』六一頁、吉川弘文館、一九六五年）。
- (7) 丸山二郎校註『愚管抄』（岩波書店、二〇一二年、一九四九年）。
- (8) 興善寺阿弥陀如来像には快慶の銘はないが、作風から快慶作と考えられ、胎内文書とともに国の重要文化財に指定されている。
- (9) 「重源讓状」次長沼神前者、（中略）仍以年来同行得阿弥陀仏与春阿弥陀仏兩人、所補預所職也。（小林剛編『俊乘房重源史料集成』三四九頁、吉川弘文館、一九六五年）。
- (10) 石田尚豊「重源の阿弥陀名号」（中尾堯・今井雅晴編『重源 叙尊 忍性』日本名僧論集・第五巻、吉川弘文館、一九八三年）。
- (11) 「周防国在庁官置文」（『鎌倉遺文』古文書編二巻、四〇五頁、一一六三番、一九七二年）。
- (12) 「周防阿弥陀寺田畠坪付」（『鎌倉遺文』古文書編二巻、四一〇頁、一一六四番、

一九七二年）。

- (13) 「周防阿弥陀寺田畠坪付」（『鎌倉遺文』古文書編二巻、四一六頁、一一六五番、一九七二年）。
- (14) 前掲注5・松島氏解説。
- (15) 伊東史郎「善導大師の肖像」（藤堂恭俊編『善導大師研究』、山喜房仏書林、一九八〇年）。
- (16) 堀池春峰「興善寺蔵・法然聖人等消息並に念仏結縁交名状に就いて」（『仏教史学』一〇（三）、一九六二年）。堀池氏は論考中において、願阿弥陀仏が醍醐寺三寶院の不動明王像に結縁していると解しているが、『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代造像銘記篇』第二巻によつて確認したところ、願阿弥陀仏の名前みえない。
- (17) 「願阿弥陀仏灯油米寄進状」（『鎌倉遺文』古文書編一〇巻、百巻本東大寺文書一五号、三一六頁、七四四一番、一九七六年）。
- (18) この消息は、『鎌倉遺文』古文書編三巻には便宜上元久元年（一二〇四）の箇所に収めているが、伊藤唯真氏によればもう少し早くみてもよいのではないかといい。
- (19) 伊藤唯真「初期浄土宗における善導信仰について」（藤堂恭俊編『善導大師研究』、山喜房仏書林、一九八〇年）。
- (18) 堀池氏は前掲注15の論考の中で「春阿弥陀仏」と記載しているが、文意からすれば「願阿弥陀仏」の誤りと解せられる。
- (19) 前掲注17・伊藤氏論考。

〔付記〕

本稿を執筆するにあたり、来迎寺（慈眼寺）住職の北條幹二師、および副住職の北條慈応師の両氏には善導大師坐像の拝観と調査をお許しいただきました。また、興善寺長老の森田孝隆師には阿弥陀如来像と興善寺文書に関する貴重な話をおうかがいしました。ここに記してお世話になった方々にお礼申し上げます。

図1は『日本の美術 肖像彫刻』一〇（至文堂、一九六七年）、図2は『国宝・重要文化財大全』三（毎日新聞社、一九九八年）より転載させていただきました。

なお、本稿は二〇〇九年度財団法人高梨学術奨励基金、および二〇〇九年度科学研究費補助金・若手研究（B）「東アジアにおける仏教美術の伝播について―供養者像に注目して―」の研究成果の一部です。